



+ 地域おこし協力隊

佐藤 菜摘 SATO NATSUMI

Topics

美術を始めたきっかけ
デジタルとアナログ
先生との出会い
仕事と制作
北教大岩見沢から、その先へ

ZAWA+について

2020年より、新たに始まった i-BOX のシリーズ企画「ZAWA+」。本展では岩見沢(ZAWA) から飛び立った、卒業生のその後と現在(+)をご紹介します。岩見沢校が現在の芸術・スポーツを学ぶ大学に形を変えてから十年以上が経過しました。これまでに岩見沢の地を巣立った卒業生たちは、社会経験を積みながら近年、活躍の幅を広げつつあります。教員、会社員、クリエイター… 様々な進路に進んだ卒業生たちは、今一体何を考え、何を作っているのでしょうか？「ZAWA+」では、社会とかかわりながら、自らの作品を作り続ける卒業生の皆様をご紹介します。



1992年秋田県生まれ。幼少時代は保育園で支給される画用紙を全て埋めたり、小学校時代も休み時間ずっと絵を描いて遊んでいた。中学時代は美術部が無く「創作部」という手芸・料理・美術などの文化系生徒がふわり集まる部活で楽しく過ごす。

その後、秋田県立増田高等学校に進学し、美術部に所属。部活動の卒業生に、北海道教育大学岩見沢校へ進学した先輩がいたため、美術コースへの進学に興味を持った。

在学中は芸術課程美術コースでデジタル絵画研究室に所属し、早くから札幌市内で精力的に個展を開催。北海道教育大学大学院へ進学する。大学院修了後は北海道教育大学の非常勤職員を経て、現在の西興部村地域おこし協力隊として森の美術館「木夢」に勤務中。

好きなものはフルーツ、夕方、温泉。最近ハマっているのは焚き火。

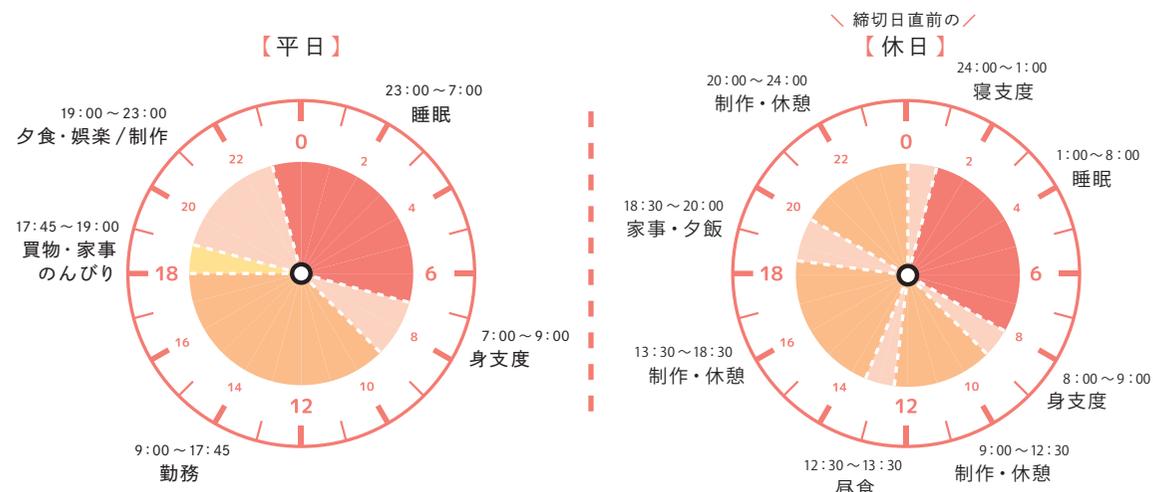
サ トウ ナ ツ ミ
佐藤菜摘

vol.04 + 地域おこし協力隊

ナツミさんってどんな人？

HITOTONARI SPACE

Q.1 | ナツミさんの一日



Q.2 | ナツミさんの5カジョウ

- + がんばりすぎない
- + ちょっとでも興味のあることはやってみる・行ってみる
- + 「なんかよさそう・なんかいや」を大事にする
- + 流されてみる
- + 人との縁を大事にしたい

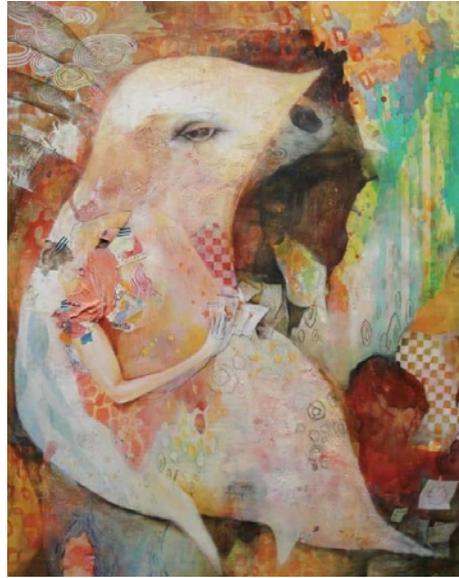
Q.3 | 現在のお仕事



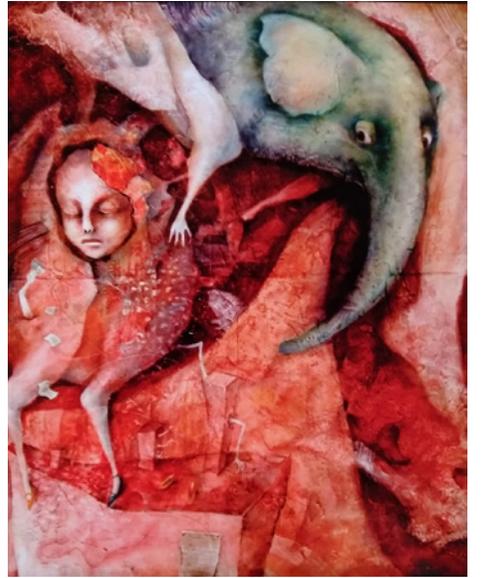
現在は、地域おこし協力隊として森の美術館「木夢」に勤務する中で、職場や教育委員会のイベント運営に携わっています。また、村由来の素材をつかった「土絵の具ワークショップ」や「木育活動」に関わるイベントなどを企画し村内の保育園児～大人を対象に行っています。



※3. 卒業制作 「メモリーランド」 F150 / 2015



※2. U21 受賞作品「まどろもり」2012



※1. 高校3年生の頃の油彩画「悩み」2010

美術に明け暮れた学生生活

—美術を始めたきっかけを教えてください。

保育園の頃、一つ上のお姉さんにとっても絵が上手な子がいて、私もこうなりたい!と思いひたすら人や服の絵を描いていました。真っ白な雪の上に、色とりどりの色水を撒いて絵を描いて遊んでいた記憶もあります。油絵を描き始めたのは高校進学からです。

私に通っていた高校は普通科がなくて、総合学科のコース選択で美術を選択したら、多い時で授業の半分が美術になりました。美術部にも所属していましたが、高文連の時には×切2日前から部員みんなで学校に泊まって、徹夜して絵を描いていました。2日徹夜した後には作品をトラックに乗せて、「行ってらっしゃーい!」と言いながらトラックを追いかけたのは今思えば青春でした(笑)。当時は少し鬱々とした暗い画風*でした。

—その後、北海道教育大学に進学した佐藤さん。大学時代はどんな

生活を送っていたのですか?

週2くらいでバイトをしながら制作をしていました。大学1年ではU21で賞をいただき*2それもきっかけになり様々な展示に誘っていただく機会が増えました。大学時代は(働いている今と違って)圧倒的に制作の時間が取れたので、良い時間でしたね…。学部4年と院2年、楽しい6年間でした。大学院では穏やかに先生たちとゆっくり色んな話ができたり、自分がやりたいことをするための時間を確保できたのがよかったです。

「記憶装置」としての作品

—佐藤さんの作品には、いつも不思議な書き込みがたくさんされていますね。作品を見ているだけで色々発見があります。

基本的に作品は自分の記憶に根差したものの・モチーフを描いています。卒業制作*3ではたくさんコラージュした作品を制作しました。その時食べたお菓子の袋を貼ってみたり、友達で作っていたブロー

チや買い物のメモなど日常の一面を切り取って貼り付けました。今でもそうですが、作品に文字

を書きこみ始めたのは実はすごい昔からなんです。小学校の時に図工の授業で絵にたくさん文字を書いていたら、先生に「絵に文字は書いてダメ!」と言われて、「どうしてダメなの?」と当時の私はものすごい憤りを覚えた記憶があります。多分そこからわざと絵の中に文字を書くようになりました。作品は個人的な記憶装置として描くのが主です。でも、展示会で作品をふわふわと一周だけみて去って行かれてしまうことが寂しいなと思ったのをきっかけに、立ち止まってじっくり見た人が発見があったりくすりと楽しんだりできるようなものが作りたいなと思いい、いろいろこちゃこちゃと描くようになりましたね。

デジタルとアナログ

—さて、佐藤さんの所属していた

研究室は「(旧)デジタル絵画研究室」です。佐藤さん自体は一貫して油絵を描いているように見えますが、デジタルでも制作を行っていたのでしょうか。

入学当時、所属先はなんとなく版画(当時は油彩第三研究室)の研究室がいいな、と思っていたのですが、先生が退官されて入れなくなっていました。そこで、デジタル絵画を苦手なりにやってみるのもいいなと思い直して、デジタル絵画研究室へ入った…という経緯があります。研究室も先生も優しそうで楽しそうでしたしね。結局、研究室には6年在籍したわけですが、「デジタルでできます!」と一言も言えずに終わりました(笑)。

仰る通り、デジタル絵画研究室でも一貫して油絵を描いていて、研究室を汚して先輩にこっぴどく怒られてしまうこともありましたが(苦笑)。

基本的には生な感じや、思いつきで描けるので、アナログの方が自分の描きたいものに合っているなという感じがしていますね。



※6 (右上) 西興部村立上興部小学校閉校に伴う「上興部入植～現代に至るまで」のペーパーアート原画
 ※7 (右下) 保育所内で、年長・年中を対象に野菜スタンプ遊びを企画した。
 ※8 (左) 西興部村移住後の作品「あのととき」2022



先生との出会い

—先生はどんな方でしたか？

担当教員の新井先生^{※4}は、「トップクラスの作家になれ！」という雰囲気ではなく、「自分や購入した人がお家に飾ってみんな楽しんでる絵を描こう」という感じの先生でした。当時はあまりピンときていませんでしたが、卒業してからはそういう楽しみ方をしてもらえるのがいいなと思っています。

先生から頂いた「みんなが楽しめるものを作れたらいいね」とい

う言葉もそうですが、制作していく中で、トップを目指してキラキラしない、素朴な楽しみ方が良いと思えるようになったのはよかったです。それが現在の職場で子どもたちとモノづくりなどをする際の考え方にも通じています。

新井先生は何を描いていても否定しない、しっかり穏やかに生きていくことを望む方でした。美術を教えるだけでなく、周りの様々な部分にも目を向けて理解し、アドバイスの中で気づかせてくださるような先生でした。そのおかげか、



※4. 新井先生と佐藤さん

卒業生には華々しく活躍していかくとも、生活の中でこつこつ制作していく方が多いように思います。

—少し意外です。札幌の最先端を走っているように見えていました。

「描かないと死んでしまう！」というタイプではなかったのですが、学部時代には制作が少し辛くなってしまうこともありましたが、今でも描きたくない時はあります。でも、「締切があるので描く！」と頑張る中で良い作品ができるようになりますよ。



※5. 西興部村 森の美術館「木夢」
 西興部村の森林資源を原料として制作された「木の砂場」をはじめとする木製遊具や、トイシアターなどの設備を備えた全天候型の屋内施設として1997年に開館。村の子供たちだけでなく近隣市町村からも子どもたちが遊びにやってくる。

村で、自分ができることを。

—現在の仕事について教えてください。

現在の仕事は友人の紹介で入りました。西興部村にある森の美術館「木夢」^{※5}に常駐しながら、「地域おこし協力隊」として何か村に還元できるようなことを企画・運営しています。

—実際にはどんなことをやっているんですか？

1年目は膠^{にかわ}と村の土を使って、土絵の具^にを作る企画をたてました。

西興部村はエゾシカが多く生息していて、道内2ヶ所しかない「エゾシカ猟区」というエゾシカを狩猟資源として管理し村外からのハンターに狩猟の場を提供している場所があり、とてもエゾシカと縁のある村です。そこで、エゾシカから膠を作ろうとしたのですが、1年かけて作って見たものの、結果想像以上に難しく断念しました…。

が！めげることなく2年目以降は村のジャガイモからでんぶんのりを作った絵の具を作ろうという企画をしています。それは木育なのか？という賛否両論はありますが…。直近では、近所の閉校してしまっただけの小学校の入植から現在までを振り返る人形劇の原画（線画）も担当しました^{※6}。大学で学んできたこととこの場で求められていることを組み合わせ、自分に出来ることをやっています。

—木夢に遊びに来る子どもたちと一緒に絵を描いたりすることもあるのでしょうか？

絵を描きましょう！というよりは、手で触って遊ぶものの中に絵

がある感じですね^{※7}。植物や乾いた木など自然と関わる素材を使って、手で触ってできることを企画しています。最近は葉っぱでステンシルとか、土で染めものも面白そうだな、なんて考えています。実は職場に自分の100号を飾ってもらっているのですが、お客さんから見える位置にあるので子どもたちも見ていますね。楽しんでみてくれる…：気がします！

—現在は西興部村で暮らし、制作を行いながら、年に1〜2回のペー
 スで作品展示を行っています。西興部村に暮らすようになって、作風
 に変化などはありましたか？

明らかな差は無いですが、これまでと違って風景画を描くようになりまして、これからは抽象画が増えていきそうな予感がします。作品はゆっくりなら描いていけそうかな、という感じ。でも最近、絵の雰囲気やモチーフがより子供らしい雰囲気になったかなとは思っています^{※8}。今の環境に影響されたんでしょうか。

ZAWA+

ロゴについて

卒業したあとどんな仕事をしていても、生活をしていても、大学で学んだことや、大学の仲間たちと過ごした時間は生かされている。どんな経験も、この先の自分につながっていく、という意味を込めて、「ZAWA+」の文字を一筆書きのようにつなげました。また“人生山あり谷あり”というイメージに合わせ、丸みを帯びたデザインにしました。

ZAWA+ vol.04 佐藤菜摘「日々のあわいを象る」

会期：2022年9月22日（木）～10月4日（火）

時間：10：00～12：00、13：00～16：00（※最終日は15時まで）

会場：北海道教育大学岩見沢校 BOX [i-BOX]

岩見沢市有明町南1番地1 JR 岩見沢複合駅舎 有明交流プラザ2階
入場無料

企画：北海道教育大学岩見沢校 i-BOX

尾崎芳子 / 煤田真実 / 藤野留朱 / 平松莉奈 / 中島聡一朗



岩教から、その先へ

「佐藤さんと言えば、札幌市内で年間3〜4回個展を開催するなど、最前線を走っていた印象です。札幌を去るとき、作家としての葛藤はなかったんでしょうか。」

「最前線にいたつもりは全くなくて、楽しそうな、合いそうな所へ行ったという感じです。」

「その場の与えられた環境で生きることが人より得意なんだと思います。もちろんデメリットもちゃんとあって、展示に気軽に足を運ぶことが減ってしまったり、アクセスや、制作している人との近さが遠のいてしまった…というのはありますね。でも、自然豊かなところでゆっくり描くのも表現の幅が広がるのではと思っています。いる場所で楽しめばいいか！くらいの気持ちです。」

「では、佐藤さん自身が今後やってみたいことはありますか？」

「今までは札幌で作品を発表することをメインに活動してきましたが、

「が、今の仕事を通して子どもたちに作ることを楽しさを伝えることに興味を持ち始めました。どういった形かは分かりませんが、自分がやってきたことを活かして何か子どもたちに関わる仕事ができればいいなと思っています。」

「もちろん自分自身の制作も続けていきます！その形態が絵画なのか絵本なのか立体か、形は変わるかもしれませんがモノづくりは続けていきたいと思っています。」

「最後に、今美術を学ぶ人に向けてメッセージをお願いします。」

「たくさん制作して、たくさんいろんな場所に行って、たくさん楽しんでください。本当に辛いことがあったらやめてもいいんだよ、と伝えたいですね。制作自体が辛いというのはもうつきものですが、それとは別で、自分が楽しめる場をたくさん見つけてください。依存先はたくさんあった方がいいですからね。」